

部下が語る蔣経国と江西省新贛南建設 ——元贛県県政府幹部劉景星氏訪問記録——

(明海大学) 山本 真

1937年にソ連から帰国した蔣経国は、早くも翌38年には江西省保安司令部新兵督練處處長に就任し、その長い政治生活のスタートを切った。続いて、1939年6月からは江西省第4区行政督察專員兼保安司令の職に就き、贛南11県（贛県、龍南、定南、上猶、信豐、安遠、尋鄔、南康、大庾、崇義、虞南）において、「人みな、仕事有り、食有り、衣有り、家有り、教育有り」⁽¹⁾をスローガンとした「新贛南建設」を提唱した。これは行政、経済、治安、教育などの各項目の建設、発展を目標とした理想主義的な改革であった。そして、これら各県の中でも最も中心的に建設が進められたのが、專員公署の置かれた贛県であった。

この度、聞き取り調査に協力していただいた劉景星氏は当時蔣経国の下で贛県財政科を切り盛りし、実務レベルで同事業の推進にあたった人物であり、また新贛南建設に関する史料集『蔣経国先生建設新贛南重要文献輯録』（章貢学会・劉景星編、台北、自費出版、1997年）の編集・出版責任者でもある。そこで訪問者は現在台湾の台北県中和市にて引退生活を送っておられる劉氏に、蔣経国の人柄、新贛南建設の実情、また劉氏が知るところの国民党内の派閥抗争や「国共内戦」における国民党の敗因など多岐にわたってお話しいただいた（1997年8月19日・同年12月24日訪問）。このようなささやかな作業が今後の国民政府研究や蔣経国研究の一助となればと願うものである。

ところで、聞き取り調査の性質として、話しの重複、事実関係に対する劉氏の記憶違い、などの過誤は免れなかった。そこで、訪問記録をまとめるに当たっては、質問の各項目ごとに記録を再編集し、簡潔なものとし、なおかつ可能な限り文献

資料との照らし合わせを行なった。そのため文献資料を使った補足説明の方が訪問記録より長くなってしまった項目もある。また、劉氏には自費出版の回顧録『我生有幸——劉景星七十生辰之回顧』台北、1989年、及び『星月樓主文選集』第1輯、第2輯、台北、1992年、1996年、などの著書があり、新贛南建設に関しても詳しい記述がなされている。それゆえ、これら回顧録を使い、インタビューで聞き漏らした事項を補足説明した箇所もある。

- (1) 「新贛南建設目標及其途徑——民国三十年」（章貢学会・劉景星編『蔣経国先生建設新贛南重要文献輯録』台北、自費出版、1997年）。なお、原文は「人人有工做,人人有飯吃,人人有衣穿,人人有屋住,人人有書讀」である。

中国大陆での蔣経国の簡歴及び劉氏の詳細な経歴は以下のようなものである。

贛南での蔣経国略歴

1939年6月、江西省第四区行政督察專員兼保安司令に就任。

1939年8月、三民主義青年団江西支団部が成立、同支団幹事長に就任。

1940年1月、贛県に江西青年幹部訓練班を設立。

1940年10月、「新贛南建設的三年計画」を公布。

1941年10月、『正気日報』を設立、社長を兼任。

1943年3月、三民主義青年団第一次全国代表大会において中央幹事に当選。

1943年7月、三民主義青年団中央幹部学校の設立に伴ない、教育長への転出が決定。

1944年3月、贛県県長を辞任。

1945年2月、日本軍が贛県県城を占領。

1945年6月、江西省第四区行政督察專員兼保安司令を辞任。

(以上の経歴は蔣経国先生全集編輯委員会『蔣経国先生全集』(記事年表上輯)、行政院新聞局、1992年、によった。なお、朱重聖「国史館現蔵<蔣経国總統檔案>紹介」(『近代中国』123号——蔣経国先生逝世十周年紀念專輯——1998年)によれば贛県県長への正式な任命(江西省政府令)は1941年1月とされている)。

劉景星氏経歴(年齢は数え年)

1920年、江西省南康県連城郷に生まれる。6歳で私塾に入り勉学を開始する。1928年、郷中心小学4年に編入。1929年、南康県でカトリックの私立徳境高級小学校に編入し、翌年卒業。1931年、私立贛南初級中学で学ぶ。1932年、私立光華初級中学に編入。翌年、同校を卒業、同校高級中学に進学。1936年、同校を卒業、翌年上海の国立暨南大学経済系入学(18歳)。1938年、日中戦争のため暨南大学が福建省北部の建陽に移転する。1939年、三民主義青年団及び中国国民党に加入。1940年、夏の休暇で故郷に帰った際に蔣経国と面談する機会を得る。1941年、22歳で暨南大学を卒業。故郷に戻り、同年夏より贛県県政府で財務行政を見習う。同年冬、県政府財政科科長就任。1943年、三民主義青年団江西支団幹部訓練班で1ヶ月の訓練を受ける(班主任は蔣経国)。同年9月三民主義青年団江西支団龍南分団幹事長に転出。1947年、三民主義青年団江西支団視導に転出。1948年、三民主義青年団と国民党の合併に伴ない江西省保安司令部上校(大佐相当)科長に転出。1949年、所属部隊とともに贛南から広東省東部を経て、汕頭に至る。部隊は汕頭で再編成の後、国軍第12兵团に編入され金門島への増援部隊として中共軍と戦う。台湾へ撤退後、台南市自治指導員。1951年、

中国国民党台南市改造委員会委員兼書記。その後、地方政府での職務を歴任、台湾省社会処科長、高雄市建設局長を経て1984年退官。

以上、前掲『我生有幸——劉景星七十生辰之回顧』による。但し新贛南建設の機関紙『正気日報』によれば、1943年10月に劉氏は財政科科員から代理科長に昇任、1944年7月になり後任者が科長に就任している(同報1943年10月5日、44年7月23日)。そのため劉氏の回顧録には若干の記憶違いがあるようである。

Q あなたの経歴をお話いただけますか

A 私は大陸では財政科長⁽¹⁾、青年団の主任、1948、49年には江西の保安部隊で政治工作に携わり、政治作戰部⁽²⁾の主任をした。後に台湾に来了が、金門で最後の一戦を戦ったのは我々だった。共産党軍1万3千人を捕虜とし、8千人以上を殺した⁽³⁾。あの戦いの後台湾は安定した。(しかし)犠牲は大変大きいものだった。あの戦いが終わってからの数ヶ月私は精神的に大変苦しんだ。私は経国先生に「これ以上軍隊にいることはできません。これ以上いれば私は精神に異常をきたしてしまいます。他の仕事にまわしてもらえないでしょうか」と報告した。経国先生は「君が帰ってきたら他の仕事に廻そう」と答えた。私が台湾に戻ると、元来先生は私を政治作戰部⁽⁴⁾で働かせたかったのだが、結局そうはならなかった。私は経国先生に感謝した。後に先生は私に台湾省社会処での住宅建設を担当させた。結局20万戸を築くこととなった。

Q 蔣経国の下で働くこととなったきっかけは?

A 当時、私は大学3年生だった。経国先生は江西に来てすぐに新贛南南建設の計画を宣布した。先生は「人みな仕事有り、食有り、衣有り、家有り、教育有り」との五項目を主張した。当時民衆の生活は大変貧困で、若者には目標がなかった。これらの目標は我々みな希望するものであったので、誰もが蔣経国と知り合うことを喜んだ。私

も先生に手紙を書き、以下のように言った。「あなたの計画を見て、それを私は非常に敬意を持って高く評価しました。我々の中国では数千年来このようなすばらしい行政長官に出くわしたことはありませんでした」。先生はこの手紙を読んで私に返事をよこして次のように言った。「あなたが私の計画に非常に賛成であるとの手紙を受け取り大変感謝しています。あなたは地元の大学生であり、きっと故郷を愛していることでしょう。私はあなたの故郷に来て、その地方を建設しようとしています。あなた方地元の青年は必ずこの事業を支持しなくてはなりません」。それゆえ経国先生は「暇があるときに、夏休みのときにでもこちらに会いに来ませんか？会って話をしてみたいと思います」と（手紙で）言った。夏休みに私は故郷に戻り、先生に会いに出かけた。先生は私に「卒業してからここに来るのなら、私が仕事を斡旋しよう」と言った。このようにして先生の下で仕事をする事となった。

Q 官僚になるために考試院の試験を受ける必要はなかったのですか？

A 試験を受けた。公務員の資格を取得した。

Q いつ取得したのですか？

A 基本的には毎年試験を受けることができた。私がその下で働くことを経国先生が同意した後に試験を受けた。

(1) 先にも述べたように『正気日報』は1943年10月5日付けの記事で劉氏の財政科代理科長就任を報じている。また同紙は同年10月21日付けの記事で贛県県行政会議の開催を報じているが、そこでは劉氏は科長として紹介されている。

(2) 劉氏の回顧録『我生有幸——劉景星七十生辰之回顧』では江西省保安司令部上校科長であり、政治工作と民衆訓練を担当したという。

(3) 中川昌朗『中国と台湾』、中公新書、1998

年、4頁では共産党軍の捕虜は1万人、死者は5千人とされている。

(4) 国防部総政治部の記憶違いと思われる。1950年段階で蔣経国は同部主任であった。

部下から見た蔣経国

A 経国先生の最大の長所はとても公正で清廉であったところだ。蔣経国先生は何事につけ身をもって則とした。私が先生に対して最も敬服するところは、清廉であったということだ。先生はもっと金をもうけることができたのに、そうしなかった。また、冒険的な仕事もやらねばならないという訳ではなかったのに敢えて行なった。加えて先生は父君に非常に忠実だった。

Q 蔣経国は父親と衝突したのでは？

A そんなことはない。先生は常に父君の言うことを聞いた。この点は他の者にはできないことだ。経国先生だからこそだ。先生が上海で密輸などの取締りをしたとき、非常に精力的に仕事をし、経済を管制した。後にはある人物を捕まえ、5時間以内に銃殺に処することとした。しかし、先生の父君がその5時間の前に電報をよこし、「その人物についてはお前は手を出すな」と言った。先生は手を引かざるをえなかった。蔣経国先生はそうすれば上海での工作が失敗してしまうことを知っていたものの、それでも父君の命令に服した。先生は父親を尊重していた。（また）先生の第二の特徴はとても愛国的であったということだ。経国先生はソ連において苦しい日々を送ったが、彼が数十年来我々に話したことはみな国家に対して忠実だった。

Q 蔣経国はよく自分のことを話したのですか？

A 江西の時、経国先生は県長であり、私は財政科長だった。県政府には全部で10数人しかいなかった。そこで、食事と一緒に取った。食事も生活も共にした。話さないことは何もなかった。

Q 蔣経国は飛行場を建設した際にある汚職をし

た郷長を捕まえ、銃殺に処したとのことですが⁽¹⁾。
 A 確かにあった。贛南には全部で4つの（保安隊の）大隊があった。4つの大隊にはそれぞれ大隊長がいた。ある大隊長は大変よかった。土匪を捕まえるなど力があつた。ある時経国先生はその大隊長を派遣して、阿片を取り締まらせた。大隊長は数十担もの阿片を捕獲したが、その半分しか報告せず、残りを着服してしまった。これは発覚してその大隊長が銃殺された。当時我々はみな悲しかった。その夜は私もその傍らにいて成り行きを聞いていた。経国先生は大変腹を立てていた。私は先生の普段の気性を知っていたので、事情聴取の時に激しく罵られ、棒で殴ったりされた場合は、譴責された人物が死刑にはならないことを知っていた。せいぜい収監されるぐらいですまされた。しかし、その日経国先生はその大隊長に対してまったく怒気を発せず、すこぶる冷静だった。これは心ではかなり苦しんでいるということを示していた。経国先生は「もういい」と言った。我々はこれによってかえって大変危険だと思った。はたして翌日大隊長は銃殺された。先生の性格はこのようなものだった⁽²⁾。

Q それゆえ部下はみな蔣経国を恐れて、以後汚職は少なくなったのですか。

A 経国先生は非常に厳格だった。以後部下で汚職をするものは非常に少なくなった。私個人の考えでは経国先生の政治生活で最大の問題は幹部の問題であり、幹部の教育と訓練の問題だった。それゆえ、経国先生は自分が信頼できる幹部を訓練して初めて安心できたのだ。

(1) これは徐浩然『蔣経国在贛南』台北，新潮社文化事業有限公司，1993年，103，104頁，に記載されている池江郷長処刑事件（飛行場建設に当たった汚職が罪状，1944年に発生）を念頭にした質問であった。

(2) 同事件は『正気日報』の1944年6月24日付け記事で報じられている。また、これと似通

った事例では前掲『蔣経国在贛南』，93～102頁，で日本支配区との密輸を取り締まった仇貨検査隊隊長，任錫章が1940年に汚職のため処刑された事件が記述されている。蔣経国の厳格な処罰にもかかわらず，汚職の完全な一掃は容易なことではなかったことがここからも窺われる。

贛南における新県制と民意代表機関

日中戦争後期，国民政府は地方行政制度の一大改革である，いわゆる新県制を実施に移した。そこで，ここでは贛県における新県制，特に民意代表機関に関して劉氏に質問を行なった。なお，新県制の一般的概要についてはすでに詳細な先行研究があるのでそちらを参照されたいが⁽¹⁾，地方民意代表機関の設置状況，名称は各地方，時期でこととなった。それゆえ，先ずここで贛県における民意代表機関設立状況を簡単に整理しておきたい。

1991年版『贛県志』によると，1941年7月に代議機関として県行政会議が成立している。会議は当然会員（県の党，政，軍の官僚）及び指名会員（地方人士各郷一人，職業団体各団体一人）からなり，互選で常務委員会委員が選ばれた。県行政会議は民意の伝達や県予算案の審査を行なった。その後，1944年1月には臨時県参議会が成立し，省政府が臨時参議員28人を指名した。さらに同年10月には第一次県参議会議員54人の選挙が実施され，12月には県参議会が成立している⁽²⁾。ところで，以下の訪問記録で劉景星氏は蔣経国が贛南に来てから参議会が成立し，後に議会が成立したと述べているが，これは県行政会議及び臨時参議会の記憶違いであろう。

Q 当時は国民政府が新県制を始めたばかりのところだったと思いますが，あなたは国民政府の新県制はうまくいったと思いますか？

A 残念ながら新県制という制度を我々は成功さ

せることができず、大陸は変わってしまった（共産党が政権を握ったことを指す——訪問者）。制度自体について言えば当時としてはすばらしいものだった。

Q 贛南で言えば、あなた方は（新県制を特に努力して実施しましたか？）。

A やったし、だいぶよくなった。

Q 地方の郷紳は政府の言うことをききましたか。当時は参議会で彼らが議員になっていたのでしょうか。

A 経国先生が来る前はまだ江西には参議会がなかった。まだ民主を実施していなかった。軍事委員会が管理していた。経国先生が来てから後に贛南に参議会が成立した。後には参議会はさらに進んで議会となった。このように徐々に進んだのだ。新県制は民国30年に開始されたが、その最大の特徴は中央政府の地方政策にあった。地方政府は県市を基礎とした。その財政の区分として県は地方税——田賦、土地税を地方税としてとった。その前に新県制条例で規定されたものだ⁽⁹⁾。県の財政はもしも税収が不足した場合、自ら地方の法令を制定し、地方が自分で徴税できた。地方を開発し、建設するのにはいちいち中央から資金を貰う必要がなくなった。

Q しかし、庶民にとっては税が重すぎたのでは。

A そうだ。税をとるには参議会を通過する必要があった。

Q それでは参議会はあなた方の言うことをきいたのですか。

A 当時は完全に一致していたとは言えなかった。政府と参議会は永遠に反対の立場に立つものだ。しかし政策の大まかな方向については参議会を通過することができた。

Q 彼らは本当にあなたがたの政策に同意したのですか。それとも政府が公布したから言うことを聞かざるを得ず、政府を恐れたため同意したのではないのですか。

A 参議会は政府を恐れはしなかった。彼らはそれでも政府の政策に参加していた。この政策に同意したので通過させたのだ。

Q 行政側では議会の言うことをきいたのですか。

A 当時はそれほどではなかった。参議会はあくまで参議であり絶対ではなかった。やはり、県市政府が主動であり、県市政府の力量が強かった。現在の（台湾の——訪問者）議会は参議会と比べてずっと強い。

Q 当時の郷長の水準はどうでしたか。

A 中学とは限らなかったが、多くは中学だった。大学卒は郷長などやらなかった。郷長はみな行政経験があり、地元で比較的勢力がある者になった。

Q 彼らは政府の言うことをききましたか。

A 絶対に県政府の命令をきいた。

Q しかし、前にあなたは地元の土豪劣紳はあまり政府のいうことを聞かないとおっしゃったのでは。地元の権力者とは郷長や保長だったのでは。

A 当地の事情を斟酌して、その者の地元でのやり方が良くなければ、また民衆の反応が良くなければ政府は決してその者を支持しなかった。このように、その者がたとえ富裕で勢力があっても規範を守りさえすれば、政府は当然喜んで彼を使った。彼は政治上役に立った。では土豪劣紳ではどうかというと、彼らは表面上では民衆に対して良かった。しかし、実際上では彼らは富のためなら不仁をなし、地方で弱きを苛め、強きを恐れた。地方において高利貸しをし、力の無い者にとみると苛めるのであった。このような者は贛南では至るところにいた。彼らに対して民衆は大変反感をもっていたので、経国先生が来てからは、自ら訴えに来た。

Q 県の参議会にはこのような者はいませんでしたか。

A いなかったとは言えない。程度の問題だ。

Q あなた方は彼らを管理できましたか。

A できた。当時は調査して、捕まえた。

Q 他の地方ではそのようにすることは可能だったのですか。あなたがたの指導者は蔣経国だったからどんな命令でも実施できたが、もし普通の県長だったら地元のこの種の人間をコントロールすることは比較的困難だったでしょう？

A かなり難しかった。

- (1) 張俊顕『新県制之研究』台北，正中書局，1988年。酒井田夕紀子「抗日戦時期における河南省の新県制——抗戦体制構築と国民政府県制」(『史学研究』第213号，1996年)。
- (2) 江西省贛県志編纂委員会編『贛県志』，新華出版社，1991年，377頁。
- (3) 新県制を規定した「県各級組織綱要」は1939年に発布され，そこでは県財政のためには土地税の一部が当てられるとされた。しかし，1942年以降の田賦の中央接管により大きな変革が加えられた。

県財政

ここでは劉氏との訪問記録を紹介する前に，先ず田賦実物徴収実施後の県財政制度を簡単に紹介しておきたい。1941年の6月に開かれた第三回全国財政会議では全国の財政系統を国家財政系統と自治財政系統の二級とし，省財政を国家財政に合併することが決定された⁽¹⁾。また，同会議は田賦の中央移管とその実物徴収をも決定した⁽²⁾。こうした財政制度の変革に伴ない県の課税収入も改定されたが，その全体的な説明は煩雑となるので，ここでは田賦の扱いについてだけ簡単に触れておきたい。田賦は中央移管により国税となったが，その一部はあらためて県に分配された。また，県公糧として実質的な田賦附加税を一定の比率で徴収することも許された。これについて彭雨新『県地方財政』(重慶，商務印書館，1945年)は以下のように記述している——「三十二年度に中央が分け与えた県税額については，印花，遺産，契稅

は前年度に照らして処理された他，土地税(田賦，地価税，土地増値税)は実収数に照らして15%を分け与えた。その実物改徴部分については実物を中央に帰し，調査決定された実物の平均価格に基づき中央より県款を交付した。——中略——三十二年度土地税のうち県に分け与えられた額はわずかに15%であったが，各県は県級の公糧を加徴できた⁽³⁾。なお，1942年度，43年度では県は田賦徴収額の30%を県公糧として追加徴収できたという⁽⁴⁾。

これを贛県に則して検討すると，田賦徴収は1943年，44年度では「田四，購(借)六，帯征三」(正規の中央政府の実物徴収量を四とすると，強制買いつけ，または借り上げの比率が六，県公糧の比率が三)と，規定されている。具体的には贛県贛州鎮の44年度徴収は征実(実物徴収)5120石，征借(強制借り上げ)7080石，公糧3840石，積穀(備蓄米)3662石であり，公糧は征実，征借合計額の約31%であった⁽⁵⁾。また，贛県の1946年度予算歳入のうち県公糧が占める額は約3割に上っている⁽⁶⁾。ただし，これら田賦収入は中央により規定されるもので，県が自由に徴収できる独自歳入とは言いがたいものである。そこで新贛南建設を実施する経費を捻出するために劉氏は各種の努力を行なった。これについて劉氏は回顧録『我生有幸』で以下のように記述している。

県には法定財源があったものの一般行政支出を維持するにはなお不足が感じられ，各項目の建設計画に必要な経費に関しては別に財源を開拓する必要があった。とりわけ新贛南建設の設計規模は膨大であり，必要とする支出の経費もまた多かった。これにより財政の業務は空前の挑戦に臨むこととなった。私は財政科長の職を引き継いでから，すぐさま，「本県六項目財政緊急措置方案」を提出し，実施を要請した。この六項目の財政措置は，①地方建設捐の徴収を開始する——この来源には二通りあった。第一には各郷鎮の財力に鑑み，各

戸に分担負担させる。これは県参議会の公開評議を通じて実施される。第二には中央が徴収する貨物税とともに同額の建設捐を附加する。

②県有公款公産を徹底的に整理し、これを公に帰す。——この最大の目標は、県城の周囲には堀があり、それに附属する池と田があったが、悉く狡猾な連中に占拠されていた。これを法により全部回収し公有とし、収入を増やすことにあった。

③公共の生産事業を拡大し、政府の収入を増加させる。——公有財産の整理計画を組み合わせ、全县の各郷鎮に通達命令し、公有土地を全面的に利用し、公共の生産事業を推進する。例えば県城の小南門の外に荒地数百ヘクタールがあったが、整理開発の後桃を植えて桃林とした。これにより環境の改善と、収益を増大できた。

④公営事業を発展させ、民生物資を調節する——民生の需要に適應し、県営の糧食公司や日用品供应处、県銀行、屠宰場、公営質屋、大衆食堂などの設立を計画する。これらはみな計画に基づき推進された。

⑤物資買占め及び日本の敵性商品の販売に対する取締り——対日抗戦行動と組み合わせて、経済管制を強化する。物資買占め及び日本の敵性商品を販売する奸商を法により一律取締まり、並びにその物資を没収し、県庫収入に当てる。

⑥税捐の統一徴収を改善し、逃税、漏税を杜絶する⁽⁷⁾。

Q 財政問題はどうでしたか。収入はどこから来たのですか。

A これは簡単な問題だ。当時私は財政科長をしていたのでよく知っている。私は経国先生に「あなたが必要な額を捻出しましょう」と言った。

Q 中央政府はあなた方に特別な資金を与えましたか。

A なかった。⁽⁸⁾

Q それでは建設の資金はどこから来たのです

か。

A 当時の税は浪費しなければ十分足りるものだった。当初常に資金不足だと言っていた原因は、多くは政府が得るはずの収入を私人が私していたためだ。いわゆる土豪劣紳が私していたのだ。一つ例を挙げよう。当時県城には堀があったが、この堀は千ヘクタール（大変広いという意味であろう——訪問者）もあった。元々ここは政府のものだった。しかし、この地方紳士は自分たちで分け取りしてしまった。後に私は「これは公有財産である。我々政府は参議会を通過した後、必ずこれを再検査しなくてはならず、政府の所有に回収しなくてはならない。もしあなたが耕したいのならば貸し出してもよい。魚を養殖したいのなら、それもいい。借り賃を払いなさい。政府はその資金を使うことができる」と言った。

Q 当時は県政府にとって最も扱いに困ったのは地元の土豪劣紳だったと思いますが、これに対してはいかに処理したのですか。

A この点については経国先生は特別に有利な位置に居たといえよう。なぜなら経国先生はなんともいっても蒋老先生の息子で太子と同じだった(笑)。たとえ経国先生がなにも言わなくても、先生にはこの身分があった。経国先生は地方の多くの人物に対して公正に処理を行なった。先生は規定にのっとり(理想を実現した——訪問者)。第一に我々はこの区域で阿片の販売を禁止すれば、だれも敢えて阿片を販売しなかった。ここでは賭博は許さないといえ、先に布告してみなに知らせた。それでも賭博をするのなら捕まえて罰金を科し、その金を政府のものとした。

Q みな比較的蒋経国を恐れていたと思いますが、もしも他の地方、他の県であればこのようにはできなかったのでは。

A 先生の管轄した11の県ではどこも同じだった。

Q では蒋経国が管轄しない別の地方であつたら

どうですか。

A 及ばなかっただろう。——中略——人はみな中央が多額の資金を与えて経国に贛南建設を行なわせたと言うが、私はあなたがたに言おう。中央は何も補助しなかった。

- (1) 侯坤宏『抗戦时期的中央財政与地方財政』国立政治大学歴史研究所博士論文、1996年、164頁。
- (2) 笹川裕史「日中戦争と中国の戦時体制」(池田誠ほか編著『世界の中の日中関係』法律文化社、1996年) 124頁。
- (3) 彭雨新『県地方財政』重慶、商務印書館、1945年、15頁。
- (4) 同上、120、124頁。また侯坤宏「抗戦糧食供給問題之分析」(国立政治大学歴史研究所修士論文、1988年) 81頁。
- (5) 前掲『贛県志』203、204頁。
- (6) 贛県文献委員会編『贛県年鑑——民国三十四年』、1946年、74～75頁。
- (7) 劉景星『我生有幸——劉景星七十生辰之回顧』台北、1989年、69、70頁。
- (8) ここで劉氏は中央からの県財政への特別補助を完全に否定している。しかし、元贛州市市市区長徐浩然は前掲『蔣経国在贛南』、150～151頁、で新贛南建設の費用獲得のため蔣経国は孔祥熙と交渉し、1940年12月、浙、皖、閩、贛四省塩務督運処処長の職に就き、専員公署での資金不足を塩務督運処からの資金で補っていた、としている。ただし、実際にどれだけの額が補助されたかは記載されていない。

贛南における土地整理

日中戦争中、贛南での土地整理事業の進展状況は『財政年鑑 三編』によれば以下のものであった⁽¹⁾。1946年までに土地測量及び所有権登記(以下地籍整理と呼ぶ)が実施されたのは贛、上猶、

南康、信豊の県区(農地)、贛、南康、上猶、大庾、龍南の県城部分であった。また『贛州区志』では上記の地区に加え47年までに龍南の県区の一部、定南、安遠の県城で地籍整理が完成したとされている⁽²⁾。なお住民による自己申告である土地陳報は贛南では田賦の中央接管前に南康で実施され、中央接管後は第一期として大庾、龍南、崇義、信豊での作業が1942年10月に完成、第二期として虔南、定南、安遠、尋鄺での作業が43年7月に完成している⁽³⁾。なお南康県では1940年11月に土地陳報を開始し、翌41年12月に完成したが、その後より完全な土地整理が目指され、県の独自予算で地籍整理が1943年から行なわれた⁽⁴⁾。ところで劉景星氏が財政科を主管した贛県での農地地籍整理は1941年11月に準備が開始され、43年の3月に完成した。しかし、その所有権登記は同年9月からの開始となり⁽⁵⁾、登記完成までは地籍整理の成果を徴税に活かす事は不可能であったはずであり、劉氏自身も地籍整理事業には直接参加していない。それゆえ、以下の訪問記録での劉氏の回答は正式な地籍整理完成前の状況についての説明と、限定的に理解されるべき性質のものであろう。

Q あなたは財政科長だったが、贛南で徴収したのは田賦でしたか土地税でしたか。

A 田賦だった。当時は現金ではなく稲を徴収した。政府は実物徴収を行っていた。

Q 土地陳報はやっていましたか。

A まだやっていなかった。本来土地陳報は大変重要なものだ。

Q もし、土地陳報がなされていなければ、実際に土地がどれだけあるかを把握できなかったのでは。

A 民間の土地売買契約の記載により統計した。土地や田を買ったときの契約は役所に行って登記を行なわなければならなかった。土地売買の際にはその土地が一等の水田か、二等の水田か、あるいは三等の畑か、面積はどれだけあるか、全て書

き出さなければならなかった。

Q しかし、それを政府に告げなかった場合は。

A 事実でない報告があった場合はどうしようもない。

Q 国民政府は正確な登記簿をもっておらず、明清時代の土地冊に照らして徴税していたのでは。

A その土地冊はなかった。贛南ではそのような土地簿すらなかった。

Q それではこの問題はどのように処理したのですか。

A 登記をやった。一筆の土地の売買があれば売買契約を書いた。政府内に登記を司る部門があった。政府が印章を押すのだが、押した後は申請者の権利を保証する。そして、登記がなされた時、我々が統計を取った。あなたの土地がどれだけあるか統計を取ったのだ。このように一筆、一筆やった。その他に一軒、一軒訪問して、どの土地を耕しているかということを調べたりもした。

(1) 「第五篇 土地税 第二章地価税及土地増値税」105頁（財政部財政年鑑編纂処『財政年鑑三編』, 1948年）。

(2) 「土地管理」（江西省贛州地区志編纂委員会編『贛州地区志』新華出版社, 1994年, 第一冊, 644頁）。

(3) 「第五篇 土地税 第一章田賦」61, 65頁（前掲『財政年鑑 三編』）。

(4) 「新南康県政建設——南康県政府推行三年計劃総報告」, 1943年, 151-167頁。

(5) 贛県政府秘書室編『贛県県政府推行三年計劃総報告』, 1943年, 147-151頁。

蔣経国と贛南での土地改革

日中戦争後期、国民政府は「土地政策戦時実施綱要」, 「戦時扶植自耕農実施辦法」を發布, 土地改革を実験的に開始した。そのうち比較的名なものとしては重慶郊外の北碚実験区, 福建省龍岩実験県, 甘肅省湟恵渠実験区などがある⁽¹⁾。そして

あまり知られてはいないが蔣経国も自らの新贛南建設にこの土地改革の実験を取り入れようと試みた。このため蔣経国は「新贛南地政实施方案」を作成し, そこに扶植自耕農（自作農創設）の規定を盛りこんでいる。これは第四専員区各地で五年以内に約二十一万市畝の自作農創設を目指したもので当時としては比較的大規模な計画であった⁽²⁾。

結論から言えば, 1944年に蔣経国が贛県県長を離職し, 重慶で中央幹部学校教育長に就任, さらに45年には第4区専員の職も辞任したため, この計画は事実上竜頭蛇尾に終わってしまった。しかしながら, 贛県に設置された沙石郷吉埠実験区では有償での土地改革がごく小規模ながらも実施に移されている。その内容は『贛県県政府推行三年計劃総報告』によると, 1943年1月から業務が開始され, 全実験区約千七百五十市畝の土地調査, 中国農民銀行からの資金借り入れによる地主からの土地買い上げ約六百七十市畝, 区域内での土地の区画調整などが同年11月までに行なわれた。そして, 新たに二百四の単位農場が1944年1月までに創設される予定であった, という⁽³⁾。また, 上猶県広田実験区でも自作農創設が開始され, 結果二千七百十一畝, 自作農二百一戸が創設されたという⁽⁴⁾。ここから当時, 蔣経国が土地改革の必要性を一定程度認識していたこと, またどのような方法での土地改革が目指されていたのかが明かとなる。そこで, 訪問者は蔣経国と土地改革の問題について劉景星氏に質問した。

Q 蔣経国は贛南で土地改革を実施したかったのですか。

A うまくできなかった。時間が短すぎた。

Q 地元の間人は反対しなかったのですか。

A 反対しなかった。経国先生は（専員をした）あの六年の最後の三年間で三つの飛行場を作った。これはアメリカのシェンノート将軍が前進基地を必要としたためだ⁽⁵⁾。昼夜ぶっとおしの突貫作業を行ない日本と対抗した。それゆえ当時は戦

争をできるだけ迅速に、且つ勝利のうえに、終結させるということが最も重要だった。その他の仕事はやや後回しにした。

Q 土地改革といえば陳誠が行なったこととみなが思っているが、しかしこの土地改革の問題について、蔣経国はどのように考えていたのですか。蔣経国も元々贛南で土地改革を試みています。

A 経国先生と陳誠先生の間には台湾での土地改革に関して異なった意見はなかった。二人とも同じ考えだった。

Q では蔣経国も（台湾で）土地改革を行なわなければならないと考えていたのですか。

A そうだ。当時、陳誠先生たちは年齢も比較的上で、彼は既に副総統だった⁽⁶⁾。経国先生は確かに陳誠を尊敬していたし、協力もしていた。

(1) これについては拙稿「抗日戦争時期国民政府の扶植自耕農政策——四川省北碚管理局の例を中心にして」（『史潮』新40号，1996年）を参照されたい。

(2) 蔣経国「新贛南地政实施方案」（『人与地』第三卷第十期，1943年10月）。

(3) 前掲『贛県県政府府推行三年計劃総報告』，152頁。

(4) 朱倫喜，郭世鏗「扶植自耕農」（『蔣経国在贛南——江西文史資料選輯』第35期，1989年）。郭德鈞，郭世作「蔣経国在我県広田村搞所謂扶植自耕農示範区的概況」（『上猶県文史資料』第2期，1990年）。

(5) シェンノート空軍のための飛行場建設は1944年秋より大余県で建設に移された。しかし、結局日本軍の侵攻により、完成しなかった。これについては徐浩然「新城機場的興建与支滅」（前掲『蔣経国在贛南——江西文史資料輯選』所収）。

(6) 陳誠は1949年に台湾省政府主席兼台湾警備総司令，50年に行政院院長，54年に副総統に就任している。この部分は劉氏の記憶違いである。

贛南での蔣経国の部下

Q 当時蔣経国の下で働いていた人々についてあなたはこれらに人々を知っていますか（名簿を見せる）。

A 高礼文＝（既に死去），正気日報。

曹聚仁＝（香港で死去），同上。

黄寄慈＝（台湾に長く滞在した後アメリカへ赴く），元秘書。

周靈鈞＝（後まで蔣経国に付き従った），1996年死去。

蔡省三＝（知らず）。

（各人物のその後の動向については劉氏の教示による。なお，周靈鈞は第4区専員公署主任秘書を務め，蔣経国が台湾で国防部総政治部主任となると総政治部主任弁公室主任を務めている。また曹，黄，周，蔡はそれぞれ蔣経国に関する回顧録を残している人物であり，特に曹聚仁の著作は有名である⁽¹⁾）。

Q この周靈鈞という人物は特務ではなかったのですか？⁽²⁾

A 完全に誤解だ。彼と黄密は中央政治学校卒業で早くから政治に携わっていた。彼らは贛南に来る前に重慶市政府で仕事をしていた⁽³⁾。どのようにして贛南に来たかについては（以下のような経緯がある——訪問者）。経国先生が贛南に来て行政専員になった時，経国先生が最初に連れてきた幹部はモスクワの中山大学の同窓生だった。経国先生の主任秘書，科長，何人かの県長はみなそのような人々だった。当時は日本と戦争するために国共合作をしていた。——合作は合作でも実際上は多くの部分で完全には合作できなかったが——。それゆえ，経国先生は（ソ連から）戻ってくると中山大学の同窓生を使ったのだ。後のある時期には外部の者が贛南は共産党になってしまう，といった。

Q 後に蔣経国が重慶に行つて，中央は周靈鈞を

派遣してきたようですが？

A (派遣したのは) 江西省党部だ。国民党の党部は贛南の状況には不満があり、多くの報告があった。これらの報告はみな蒋老先生に見せられた。老先生は経国先生に電報を打ち、重慶に来るよう言った。経国先生が重慶に着いた後にこれらの報告を見せて、お前の下の人間には意見のあるものもいるようだが、どのように融和するのかと訊ねた。後に老先生は経国先生に「陳果夫、陳立夫に会ってきなさい。彼らは党の実務派だ」と告げた。そして陳果夫は経国先生に周を推薦した。

Q 彼らは中統の人間ではないのですか？

A 彼らは中央政治学校だ。党務学校の第一期生だ。

Q CC派のなかに中央統計局があるとのことですか。

A 中央統計局は国民党内部の一つの単位だといえる。

Q 周たちはそうではないと思われませんか。

A 思わない。

Q 蒋経国は彼らを嫌っていませんでしたか。

A 嫌っていなかった。

Q 新県制下では6つの科があることとなっていますが、当時の県の幹部を教えてもらえませんか。

A 第1に民政科、第2に財政科、第3に教育科、第4に建設科、第5に軍事科、第6に社会科があった。

Q 地政科はなかったのですか。

A 当時、表面上は地政科があった。さらに義務労働科もあった。

Q これらの責任者の名前を書き出していただけますか。

A 民政科長 韋安仁 (後に台湾桃園県党主任委員)

財政科長 游鯤, 劉景星が後任。

教育科長 沈傳藩 (大陸残留)

建設科長 吳善樑 (上海漁業管理处

を経て大陸残留)

軍事科長 王昇 (台湾で政治作戰部主任, パラグアイ大使)

社会科長 彭志明 女 (大陸残留)

義務労働科長 李守廉 (台湾省党部総幹事)

地政科長 記憶せず。

(以上はあくまでも劉氏の記憶によるもので、実際の県政府の組織は以下のように変遷した。民政、財政、教育、建設の四科は常設であったが、1941年には会計室、合作指導室、統計室、社会科、糧政科が置かれた。42年には戸政室が増設され、44年には軍事科と糧政科が取り消され、義務労働科と地政科が増設された⁽⁴⁾。また、蔡省三の『蒋経国系史話』でも県政府の人員が紹介されており韋安仁、游鯤、吳善樑、王昇については劉氏の記憶と一致するものの、蔡は教育科長を徐恒瀛、社会科長を沈知方としている⁽⁵⁾。ただし人員は時期によって入れ替わりがあるため、一概に記憶違いがあるとは言えない)。

Q 台湾に来なかった人物については理由を知っていますか。

A 彼らは経国先生の推薦で各方面で仕事をしていた。それゆえ来なかったのは個人の状況が異なったからだ。

(1) 曹聚仁『蒋経国論』香港、創墾出版社、1954年、には鈴木博の邦訳『蒋経国と台湾』、三一書房、1978年がある。黄寄慈編『常言実録』出版地不明、1959年。周靈鈞「経国先生与新贛南」(劉景星『星月楼主文選集』第二輯、自費出版、1996年、所収)。なお原載は『南康同郷会会刊』創刊号、1989年7月。蔡省三『蒋経国系史話』香港、七十年代雜誌社、1979年。

(2) 蔡省三によると陳兄弟の推薦で4区専員公署内で働いていた中央政治学校の出身者は10人を下らなかったという。彼らはこのCC派

の結束を保持し、「太子派」の中で勢力を養い太子を包囲しようとしたという——『蔣経国系史話』72頁。もちろんこの話しの信憑性には問題があるが、周が陳の推薦で送りこまれたことには注目せざるを得ない。周は後には蔣経国の側近となっているが、少なくとも送りこまれた当初は、他の蔣経国派の者から陳兄弟のスパイの疑いを受けたのではないかと、との疑問を抱いた。そのためこのような質問を行なった。

- (3) 四川省政府民政庁の間違いである。これについては周靈鈞「從幾封信函体認経国先生的風範」(劉景星『星月樓主文選集』第2輯, 台北, 1996年) 324頁。
- (4) 前掲『贛県志』, 363頁。
- (5) 前掲『蔣経国系史話』, 69頁。

国民党内派閥闘争について

Q 三民主義青年団⁽¹⁾の人々とCC派の人々はうまくいっていなかったということですが。

A 外部の噂はそのようなものかもしれない。経国先生の下にはモスクワ派, CC派があり, 多数派は軍事派と地元派だ, という人もいた。しかし, 実際には(対立は)そんなにも激しくはなかった。

Q あなたは三民主義青年団の派閥ではなかったのか。

A 私は三民主義青年団だったが, また地元の間でもあった。

Q 当時は派閥の関係で, 不和があったのでは。

A 決してなかった。

Q 省党部は基本におもしろくなかったのでは。

A 省党部がおもしろくなかった最大の問題は, 経国先生が多くのことを直接老先生に報告したことだ。先生は規則どおりに省党部に出かけ報告するような人物ではなかった。これにより多くのものが(先生を)妬んだのだ。

Q 当時, 江西省主席(熊式輝——訪問者)と蔣経国は密接だったのでは。

A 密接とは言えない。彼は政学派だった。CCではなかった。だから, 政学派はまた別の派閥でCC派と対立していた。

Q 省党部はCC派で, 省政府は政学派だったのですね。

A 軍事単位である保安司令部, 省訓練団, 軍防区域, これらは黄浦系だった。江西では三つの派閥があり事情は複雑だった。ただ, 経国先生はこれらの事情についてあまりとりあわなかった。先生はやりたいようにやっていた。

Q それは蔣経国が蒋介石の子供で, そんなことに関わる必要がなかったからでしょう。しかし, 普通の人物であれば相当厄介なことだったのでは。

A この世のことは大変難しい。三民主義青年団とCC派, 政学派は激しく闘争した。

Q 政学派はそんなには力がなかったのでは。

A 政学派はみな高層の人員だった。

Q しかし, その下には幹部がいなかったのでは。

A そうだ。下には幹部がいなかった。縣市にはとても少なかった。県長である幹部はいたが, 縣市以下では幹部がいなかった。

Q 政学派の領袖は張群だったのでは。

A 黄孚であり後に楊永泰であり, その次が張群だ。さらに陳儀, 呉鉄城, 呉鼎昌, 黄紹雄, 熊式輝など省主席を務めた者が多い。

Q CC派は台湾に来てから比較的衰退したのでは。

A 初め, CC派は非常に強かった。立法院が改選され張道藩が院長を辞めた以後, 劉健群が立法院長になってから, 劉は三民主義青年団の一員だったが, 多くのCC派を整理した。陳立夫も当時台湾にいられなくなってアメリカへ逃げた⁽²⁾。

Q 台湾での地方党部では(旧)三民主義青年団系の勢力が比較的強かったのですか。

A 政府が台湾に来てから、台湾での党部の中では(旧)三民主義青年団の人間が比較的多かった。

Q 元々CC派だった人々は台湾に来てからは勢力が無くなったと思われますが。

A そうだ。ぜんぜんだめになった。

Q 例えば、(台湾の)地方党部で以前CC派に属していたような人物は。

A 台湾ではそのような人物はすでにとっても少なかった。現在台湾での最高層で、しかも最も早期からの幹部は陳誠先生が登用した者が多い。陳誠は三民主義青年団の派閥で、三民主義青年団の書記長だった。三民主義青年団は前期には陳誠先生を主とし、経国先生のものではなかった。最後の段階になって陳誠が死去して後、ようやく経国先生が指導者となったのだ。

(1) 三民主義青年団については従来日本における中国現代史研究では十分な研究がなされてこなかった。しかし、日中戦争期から内戦期における事実上の国民党内の大派閥であり、党団合併後も憲政実施に伴う議会でのCC派との対立は国民党を半身不随に追い込むものであった。また、陳誠や蔣経国の派閥として旧三民主義青年団出身者は台湾では主流派となっており、国民党研究のためには是非分析が加えられるべき派閥である。なお、台湾では王良卿「三民主義青年団与中国国民党関係研究(1938～1949)」国立政治大学歴史研究所修士論文、1996年があるが、この分野の研究を大きく進める研究である。

(2) この点については劉氏の記憶違いであると思われる。張道藩の立法院長就任は1952年のことであり、三民主義青年団系の劉健群の立法院長就任は1950年12月のことである。また、陳立夫のアメリカ行きは1950年10月であり、劉景星氏の目には陳の失脚と劉健群の立法院長就任がCC派の衰退の開始と映

っていたものと想像される。なお、中央政府台湾移転直後の派閥の再編成については陳明通著、若林正文監訳『台湾現代政治と派閥主義』東洋経済新報、1998年、第三章第二節に詳しい。

三民主義青年団と行政人員訓練

Q あなたは当時三民主義青年団に参加していたということですが、中央訓練団には参加しましたか。

A 私は青年幹部訓練班には参加したが、中央訓練団には参加していない。中央訓練団は県長以上が参加できた。当時私はまだ若かったので、県長にはなれなかった。

Q 地方訓練班には参加しましたか。

A 江西で青年幹部訓練班に参加した。これは経国先生が主催した三民主義青年団のもので、単に幹部訓練班があるだけではなかった。

Q 大体、何を勉強したのですか。

A 三ヶ月の訓練で主に政治性の学習がなされた。最も重要な課程は国父遺教、建国大綱、建国方略、革命建国の基本策略はみなここに包括していた。第二にはいわゆる国際事情であり、わが国の改造状況、世界の民主、専制、覇権の区別を包括していた。第三番目によりやく三民主義青年団をいかに組織し、訓練し、教育するかということが話された。大体このようなものだった。

Q あなたはこのような訓練が地方幹部を養成するために有効であったと思いますか。

A 今から振り返れば五十年も前のことだ。当時は第一に我国の教育は大変遅れていた。我が国が必要とする幹部は、戦争をし、動員をするときに必要となる幹部は膨大であった。国家は長期、健全な学校教育でこれら必要な人員を養成していなかった。そこで、短期訓練で補充しようとしたのだ。

Q 抗戦期には中央と地方は多くの人々を養成し

たようですが。

A 至るところでそうだった。

Q 当時このようにしたことは結局行政に役に立ったのですか。

A 役には立っただろう。

Q あなた方は大学卒で、高級人員だったでしょうが、たとえば郷長、保長、郷幹部の訓練では彼らの水準はあまり高くはなかったのでしょうか。

A そんなことはない。なぜなら我々が（地元に戻って、我々も県以下の訓練班を開いた。

Q しかし、あなたは大学卒でしょう。やがては県長や省の幹部になる人でしょう。保長や郷長はどうだったのですか。

A 中央には訓練団があるが、県にも訓練団があったといえる。県には県の幹部訓練所があり、訓練所の各班には民政班、警衛班、会計班、経済建設班があり、その人物の長所によって振り分けられた。また短期のもあった。

Q そんな短期に多くの技術を身につけられたのですか。

A 大変うまくいったとは言えない。少なくとも言えることは、どの方向に行こうとも、大体大きな間違いはないと言うことだ。彼らに東に行けといえば、西に行くことはないだろう。

国共内戦における国民党の敗因について

A 日本との戦争が終わったのが1945年だから国民党には46、47、48の三年しか残されていなかった。この三年間はいかなる地方にも安寧はなかった。共産党があらゆるところで活動していた。安心して土地測量や土地改革をできる県などなかった。印象深かったのは時間がますます足りなくなり、三年ではどうしようもなかったことだ。その三年の内にさらに幾つかのことがあった。すなわち、国民党は（日中戦争に——訪問者）勝利した後、国民大会を開き、中華民国憲法を制定した。地方で選挙をした時、みながポストの奪い合いを

やった。

Q 国民党はこの選挙にのために内部分裂したのでは。

A この三年は何もかもうまく行かなかった。機会がなかった。

Q 私は国民党が比較的民主的であったため（失敗した）と思うのですが。

A それゆえ、国民党の経験をみて共産党は現在大陸で、決して手を緩めて民主を試みようとはしないのだ。大陸のことは言うのもなんだが、国民党は抗戦の前は（戦争中の意味か？——訪問者）みなの方が生活があまりに苦しく、貧しかったため、戦争に勝利すると勢力範囲を分け合い、汚職を行なった。金をものにして、腐敗した。共産党は前には三反五反や文革をやり、だれもが一に清く二に白かった。しかし現在経済を発展させることとなり、急いで発財し、金もちになろうとすると、私の判断では彼らも大陸での国民党のようになるだろう。

Q 国民党は抗戦時期に腐敗したと思われますか。

A 抗戦後だ。

Q 当時、あんなにも速く敗北すると思っていたか。我々はなぜあんなにも速く敗北したのかと疑問に思うのですが。

A この問題については私の見方では、やはり国際関係上の大きな影響を受けたと思う。ソ連が力をもつようになり、アメリカにとってはスターリンが頭痛の種だった。中国の毛沢東は元々アメリカと関係が良かった。それゆえアメリカのマーシャルはかつて中国に来て熱心に2党の間を調停した。しかし、その時毛沢東はすでにスターリンの方を向いていた。これはアメリカの影響力を衰えさせた。この時日本の関東軍が使用した武器はソ連に渡されていたが、ソ連は（中国）共産党に与えた。この一部の武器は後には徐州会戦で我々国民党を打ち負かす主力となった。

おわりにかえて

劉氏に対する訪問は1997年8月19日と12月24日の2回にわたって行なったもので、全部で4時間以上に及ぶものであった。当時劉氏は77歳という高齢にもかかわらず、見ず知らずの訪問者が発した長時間の質問に辛抱強く、懇切に答えて下さった。そのご厚意に対してこの場を借りて改めて感謝の気持ちを示したい。

なお劉氏に対する訪問を振り返って強く印象に残ったことは、その記憶の鮮明さと頭脳の明晰さであった（若干の記憶違いは、50年以上の時の経過を考えれば免れ得ないことであろう）。これは他に訪問を行った旧土地行政官僚の方々とも共通するものであり、当時重要な地位についていた国民党若手エリート層の質の高さを示しているように思われた。また、贛南での土地改革に関しては、氏はその成果の不充分さを認めた後、しかし、当時は飛行場建設などの抗戦のための建設が最優先されざるを得ない状況であったことを指摘された。我々は往々にして日中戦争時期の国民政府による行政の不充分さを指摘しがちであるが、氏のような地方の幹部の立場からすれば、抗戦継続のための動員こそが最大の任務であったことを忘れてはならないであろう。

最後に、劉氏が現在に至るまで抱き続けた蔣経国に対する深い尊敬の念について一言述べておく必要がある。これは2回にわたる訪問を通じて一貫して受けた強い印象であり、決して外来者に対する表面上の装いではなかったように思われる。もちろん部下の銃殺などの処置に対しては、蔣経国の厳格さを指摘された部分もあった。しかし、若き日同じ釜の飯を食べ、苦楽を共にした、という連帯感には強烈なものがあつた。ここからも、贛南時代の蔣経国が青年たちにとって魅力的な指導者であったことが見て取れよう。若き蔣経国はその政治人生の出発に当たって、青年たちと

直接接することを通じて、自らに忠誠な追隨者を獲得していったのであろう。

《付記》劉氏に対する訪問・テープ起こしに当たっては張文縵氏（京都大学法学研究科博士課程）の協力を得た。

